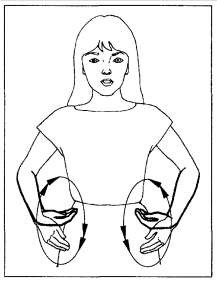
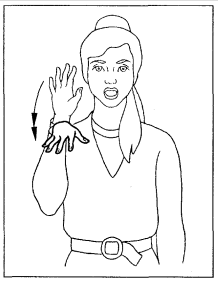
ロシアの手話

キタヤマ　忍


здравствуйте


до свидания

今年もライラックの甘く爽やかな香りが、約30年前のモスクワでの出来事を蘇らせた。ロシアになって6年目、地下鉄ヴェリャーエヴァ駅。5月なのに秋のような夕空、町の活気に居心地の悪さを感じながらトランバイを待っていた。15才くらいの少年たちが10人もいただろうか、車道にはみ出し大声でふざけながら目の前を通り過ぎて行く。一人が足を止め、どうしたのか？と尋ねてきた。気持ちが浮かない、なぜ？そんな会話をしながら、その少年が手話で話していることに気がついた。彼は私の口を読み身振りで返してくる。あまりに自然で違和感を全く感じなかった。

少し離れた仲間達が彼の視界に入るように大きな身振り、手話や声で「あっちへ行くよ！」と呼んだ。一緒に来ないかの誘いを丁重に断ると、彼は停留所のライラックを一輪折って私にくれた。口の端を指で上げて「笑って」というと手を振って、トランバイに乗る私を見送ってくれた。

ロシアで感銘を受けた事の一つが手話だ。手話話者の方達がおしゃべりをしながら散歩をしたり買い物をしたり、ある時は大盛り上がりで笑い転げているのを見かけていた。当時は、少なくとも故郷札幌では意識をしなければ接点もなく、少し暗いイメージだったかもしれない。

ロシアの手話話者が私の世界を変えた。明るく、ひそやかなモノでも「特別」でもなくなった。言葉が目に見えているだけなのだ。

ロシアの手話教育は日本よりも20年ほど早い1860年に始まった。ロシア手話はロシア語よりも単語の順序など文法が厳しいそうだ。フランス手話の系統でオーストリア手話の言葉が多く用いられている。ロシア、ウクライナ、モルドバ、ブルガリア、イスラエルで約12万人以上が使っているが、方言や教育機関不足による地域的ばらつきがある。今はYouTubeでＲＪＩＳと検索すると初歩から学習でき、共通語の普及に貢献している。アメリカ手話とロシア手話といったバイリンガルも多いようで、対応した教本もあるがインターネットが大きな役割を担っている。

実は日本でもロシアの手話教育が研究されていて、宮井清香氏のソ連時代の「もう一人の奇跡の人　オリガ・Ｉ・スコロホードワの生涯」もオススメしたい。

あの日の少年達も少しはきっと手話ができるようになっていて、今も静かに賑やかに会話していると期待し思い浮かべている。

（ビデオグラファー）

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております